

序

長田豊臣先生は、一九六二年に立命館大学文学部西洋史学専攻を卒業され、大学院を経て六五年に文学部助手に就任。以降、四〇年余りに及んで立命館大学の教員としての道を歩まれました。七〇年に助教、七九年に教授に昇任され、九三年に文学博士の学位を取得されました。一方、七四年から一年半の期間、アメリカ学術会議 (ACLS) 招聘研究員としてプリンストン大学客員研究員、八四年から一年間、フルブライト上級交換教授としてコロンビア大学、ニューヨーク市立大学の客員研究員、八八年から一年間、再度、ACLSからの招聘研究員として米国に滞在されるといった活躍をされています。

九三年からは、文学部長を二期四年間にわたってつとめられ、その間に、文学部に人文総合科学インスティテュートという画期的な、そして学際的・国際的な教学システムとプログラムを設置されました。インスティテュートは、人文学の柱であった伝統的な学問と、現代的・先端的な学問とを併存、競合させることで、教育・研究のいっそうの高度化をはかるものであり、この折、文学部は一段の飛躍がなされました。もとは、研究所などを意味する「インスティテュート」という語は、従来の文学部のイメージを変えると同時に、全学のさまざまなプログラムでも使用され、今日では立命館教学の中にしっかりと定着しています。たえず、教育・研究の高度化を追求する長田先生の姿勢は、副総長（九七年）、総長就任（九九年）の後も持続され、先端総合学術研究科の創設、文部科学省の二〇世紀COE獲得（四件）など、多方面においてめざましい成果をあげてきました。

長田先生は、物事にこだわらない鷹揚さと共に、細かい心づかいを有した人です。学部長時代の教授会の運営ぶりは、すでに「伝説」化されているほど有名になっています。時に、口角泡を飛ばして自説を述べ、反対する人には容赦なく論争を挑みつつ、その反面、相手を思いやる言葉や態度を忘れないということがしばしばありました。一見、豪放磊落、反面の繊細さといった幅といわゆる懐の深さのある人柄が感じられました。

こうした長田先生の複眼的ともいえるべき人間への接し方は、ご自身の研究テーマであるアメリカ南北戦争解釈にも如実に示されています。主著である『南北戦争と国家』（東京大学出版会、一九九二年）において、長田先生は、従来の見方を大胆にしりぞけ、「南部奴隷制

は北部産業資本主義の発展の阻害要素などであったのではなく、むしろ実体は逆に北部の資本主義的発展を補完し、加速する役割を果たしていったのである」と述べ、この視点から「合衆国の国家機構の整備」を促すことになった「南北戦争」の意義を論じられたのです。西洋史（アメリカ史）学界から高く評価されたこうした理解は、実は、前述したような長田先生の複眼的な人間観からくるものと思われるます。

学校法人立命館総長として、二期八年間という時間は、長田先生にとっても決して平坦なものではなかったでしょう。学校のことを考えると、眠れない日々があった、とご自身も語っておられます。公務による出張や学内の諸会議などからくる多忙さは、想像を絶するものがありました。が、この間、長田先生は、日本私立大学連盟常務理事や文部科学省大学設置学校法人審議会特別委員などをはじめとする諸機関の多くの要職にも就かれ、日本アメリカ学会の会長も務められるなど、学内外・国内外にわたって重要な職務をこなされてきました。

この度、長年にわたるこうした大学教育・研究の現場でのご尽力に加え、学校法人や内外の要職を歴任され、定年を迎えられました。もちろん、長田先生はこうしたお仕事を、その形を変えてさらに続けていかれることと推察しておりますが、ここで中仕切とも言うべき時を迎えられたことに、私たち後進は心からの感謝とねぎらいの思いを表わしたく思います。

長田先生に対し、学校法人立命館は、名誉教授の称号をお贈りし、その長年のご貢献を讃えます。本会は、ここに、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、このご定年記念の論集を編んで先生に献呈いたします。ありがとうございました。

二〇〇七年一月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木村 一 信